

創る

地域活性化リポート

田無スマイル大学代表
富沢木実



暖かな日差しが心地良く感じられる11月4日、東京都西東京市で、自分たちのまちの在り方について話し合うフューチャー・セッションが行われました。

西東京市は人口20万人弱。細長い東京都のちょうど中ほどにあり、10年ほど前に田無市と保谷市が対等合併しましたが、市民の間にはまだに一体感が生まれていません。

ワクワクするまちづくりを話し合おう

せん。また、工場跡地に大型マンションが建ち、新住民が増えています。

フューチャー・セッションは、テーマに関係する人たちが未来志向で対話することによって、望ましい方向性を見つけていく手法。欧州で始まり、最近では日本でも、企業や行政のビジョン作りなどに使われ始めています。

このセッションは、連続して実施する予定で第1回のこの日のテーマは「未来を担う子ども」。

子育て中のママだけでなく、会社員や行政マンのパパ、事業経営者、中高大学生を持つ親、最高齢80歳の人など、西東京市や近隣から40人を超える多様な人たちが集まり、性別や年齢、立場を超えて熱心に話し合いました。

はじめに、すでに子どもをキープワードに活動されている3人のゲスト（「市民放射能測定所あるび

話し合おう

れお」土方隆一さん、「子どもの広場」を開設している小林弘子さん、「西東京パパークラブ」のメンバー太田洋芳さん）から、活動を始めた動機、やってみて感じたことなどにつきお話を伺いました。

その後、お茶やお菓子を片手にカフェのような雰囲気なかで、「子どもたちがイキイキしているのには大切なことは」「子どもたちがイキイキと暮らせるのはどんなまち」「10年後、子どもたちがイキイキと暮らせるまちになる

お茶を飲みながらグループで話し合う参加者たち。西東京市で11月4日



ために私たちにできることは」の三つの問いについて4人程度のグループに分かれ、自分の思いを語り、相手の話に丁寧に耳を傾けました。

「子どもがイキイキするには、まず大人がイキイキしていない」と「やさしい暴力（親の期待に応えようと子どもが萎縮）は大きな問題、これに風穴を開けよう」「違いを認めようという人と付き合うとか、悪いことは悪いと言える力をつける」「子どもが信頼されている、大事にされていると感じられるまちになることが必要」などたくさんの方々の意見が出さ

れました。

参加した方々からは、「託児サービスがあつたので、気楽に参加できた。子どもたちのことを真剣に考えている人がこんなにたくさん居るといことがなんだかうれしかった！」「普段の暮らしでは、絶対に会えない多様な年代の方々と話し合え、とても刺激的でした」「子育てで悩んでいるお母さんの実際の話を聴けたことは、勉強になった」「たくさんの方が協力して未来を作っていくとすごいなと思った」などの感想が寄せられました。

こうした「対話の場」を繰り返すことで、将来的には、「自分たちの地域は自分たちで作っていくんだ」と思い・実行する人たちが増え、現在は行政が策定している総合計画などを、将来的には市民自らが作れるようなまちにしていきたいと思っています。

とみさわ・このみ

1947年生まれ。法政大地域研究センター客員教授。同大学院政策創造研究科で「地域イノベーション論」担当。田無スマイル大学（誰でも講座を開ける）を立ち上げ、自らは「地域イノベーター養成講座」を開講。